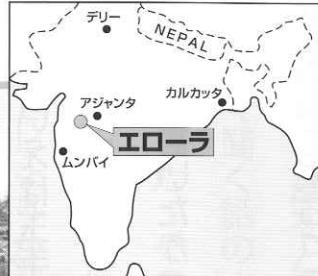
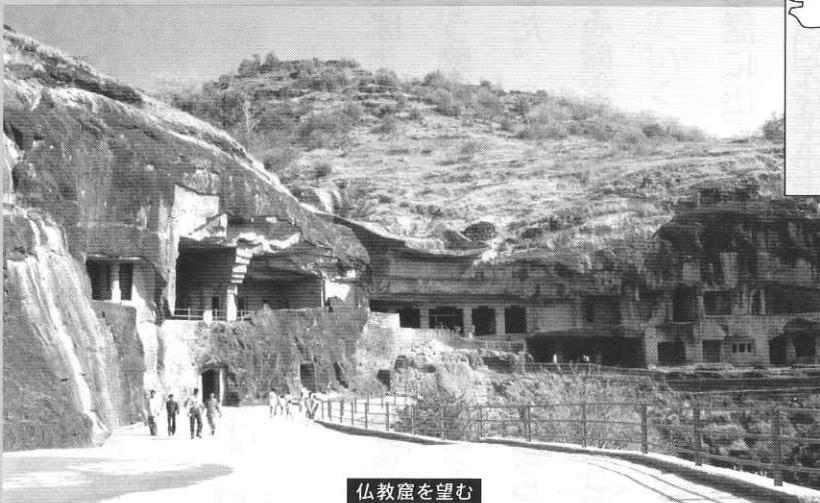


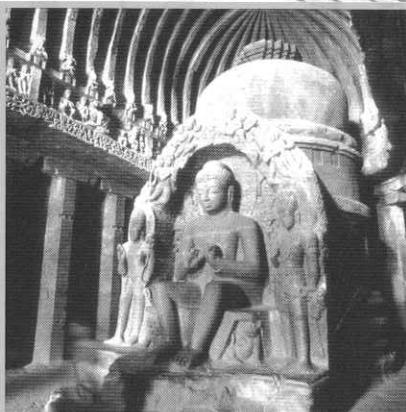
No.21 2008.3.15

身近なお寺の情報誌



インドの 石窟寺院群 エローラ

エローラ石窟寺院群は、1番窟から34番窟まであるが、1番から12番までが佛教窟である。石窟群のなかではもっとも古い時代のもので、5世紀から7世紀の間につくられた。佛教窟には2種類あり、僧侶が寝泊まりするヴィハーラ窟（僧院窟）と仏像がありお参りするチャイティヤ窟がある。ヴィハーラ窟では、修行僧がここで生活しながら修行を行なっていた。台所や寝室などの付帯設備も設けられているため、階層構造で大きな窟が多い。一方のチャイティヤ窟は、仏殿（本堂）で菩薩と聖者を従えた佛陀の像が彫られている。



写真撮影 世田谷・正法寺 白川淳敬

玉手箱と念佛

徳藏寺住職 寺田 崇裕

浦島太郎^{うらじま たろう}と言えば、子どもの頃良く聞いた昔話だと思つてゐる方がほとんどだと思います。私もずっとそう思つていましたので、ラジオ放送で龍宮城^{りゆうぐじやく}を中国で発見と聞いた時はさすがに驚きました。その龍宮城はどうも遺跡らしいのですが、その復元図を見てみると浦島太郎に出てくる龍宮城にそっくりなのだそうです。

その浦島太郎の話に出てくる特徴的なものは、龍宮城だけではありません。もう一つ話の特徴的なものといえば玉手箱^{たまてばこ}です。玉手箱は龍宮城で姫様^{おとむかわ}から渡されるものです。中には白い煙しか入つていません。しかも、その煙は人をたちまち老人にするというものです。この話は何が言いたかったのかを、仏教の教えに照らして考えてみたいと思います。

以前、お寺に訪ねて来られた方がこんな話をされました。

「知らない間に、随分歳^とをとつてしましました」

それだけだと良く聞く話のようですが、その方は病床のご主人を十数年間ずっと付きつ切りで看病していました。その間、気も張っていたのか実際の年齢よりもずっと若く感じて生活していたのでしょうか。しかし、ご主人を送った後は、何だか急に老いたように思えてきたのではないかでしょうか。そして、お寺に来られた時、先ほどのことばをしみじみとおっしゃったのです。

歳は、毎年重ねていく事は誰でも知っています。ですが、実際の老いは自らの思いとは違っているのでしょうか。実際の老いは、突然思い知られるのかも知れません。

浦島太郎の物語に出てくる玉手箱がその事を伝えていると考えますと、このお話はグツと仏教に近づいて来ます。逃れることの出来ない現実を受け入れた時、人は本当の意味に氣付くのでしょうか。親鸞聖人^{しんらん せいじん}は、その事を仏の教え、つまりお念佛^{ねんぶつ}の道とお示しになられました。それを玉手箱で伝えてきたと考えますと、この物語も何だか仏教的に感じられます。物語では残念ながら玉手箱を開けた後の話はありませんが、玉手箱を我々の眞の姿を明らかにする仏の教え、つまり念佛と解釈できれば、このお話は私たちにとってただの昔話とは違ったものになつてくるのかも知れません。

惠信尼



惠信尼

親鸞聖人の妻

特集

●親鸞と惠信尼との出遇い

●親鸞と恵信尼との出遇い
二六八頃) という。一般的には「恵信尼」の名で親しまれているので、ここではその表記を用いる。
恵信尼は、越後の豪族(みしよめのり)として京都の九条家が所有する越後介(越後国司次官)として京都の九条家にいた関係で、京都の九条家にていたといわれる。現存する『恵信尼消息』(恵信尼が末娘の覺信尼に宛てた手紙)にも、高い教養を身につけていることが知られ、都ぐらしの経験をもつ女性であったことがうかがえる。

一一〇七（承元元）年二月、朝

う。念佛のさまたげとなるのならば、どのようなことであつても厭い捨てて、これをやめるべきです。聖僧として出家して念佛申すことができないならば、妻を得て念佛申すがよいでしょう。妻を得て念佛申すことができないならば、出家して念佛申すがよいでしょう。

法然自身は生涯独身であつたものの、念佛と生活とを分離して考えるのでなく、このように「念佛を申すことのできる生活」を第一として門弟たちにすすめていたわけで、こうした師匠の考え方がある。妻帯への支えになつたともいえる。

家庭を基本とした念佛生活

は連罪を赦された。だが親鸞と恵信尼には、すでに何人かの幼い子どもがいたこともあり、またほどなくして法然の遷化せんげの知らせを聞いたこともあって、師の居ない京都には帰らずに、しばらくは越後に留まる。

一二一四（建保二）年、一家で関東に移住。以後二〇年にわたりこの地で念佛をよろこぶ家庭生活を営み、二十四輩と呼ばれる門弟

「なによりも殿（新鸞）の御往生」なかなかはじめて申すにおよばず
候ふ

『恵信尼消息』註釈版聖典八二頁

（なにはさておき、殿が淨土
往生を遂げておられることは、
いまさらいうまでもあります
せん）

恵信尼もこのときすでに八一歳
の老境に達していたのだが、離れ
て暮らしていくても、夫親鸞がまち

あげた。

あげた。

一二三五（文暦二）年、親鸞六
三歳、恵信尼五六歳頃に、関東の
門弟たちに別れを告げて、一家は
京都へと帰る。このとき恵信尼は
親鸞に同行せずに関東に残つたと
いう説もあるが、いずれにしても
一二五四（建長六）年には、恵信
尼は身内の世話や実家である三善
家の土地管理もあつてか、親鸞の
世話は末娘の覺信尼にまかせて、
越後へと戻つてゐる。

一二六二（弘長二）年、親鸞は
京都の善法院において九〇歳で往
生する。最期を看取つた末娘の覺
信尼から、その知らせが越後の恵
信尼のもとに届く。これに對して
恵信尼は返信を書き送つてゐる。
その一節に、

「なによりも殿との（親鸞）の御往生ごおうじょう、
ながながはじめて申すにおよばず
ぞうふ」

『恵信尼消息』註釈版聖典八二頁

（なにはさておき、殿が淨土
往生を遂げておられることは、
いまさらいうまでもあります
せん）

恵信尼もこのときすでに八一歳
の老境に達していたのだが、離れ
て暮らしていくても、夫親鸞がまち
あげた。

廷は、法然を中心とする淨土教の集団に対して、専修念佛停止を発令。親鸞の師・法然は土佐へ、親鸞自身は越後国府へと流罪になつた。親鸞三五歳のときであつた。恵信尼は親鸞より九つ下である。親鸞との結婚の時期はこの流罪以後であるが、すでに京都において結婚していたとする説と、流罪後の越後において結婚したとする説とがあり定かではない。ただ、九条兼実が法然に帰依し親交があつたことから、法然の門弟であつた親鸞が九条家に入りして、いたことも十分考えられ、京都において出遇いがあつたとする見方も有力である。

●親鸞の妻さいたま

朝廷から僧籍を剥奪され、遠流の罪に科せられても、親鸞には、どんなことがあっても救うと誓われた阿弥陀仏の本願の信心に生きる道があった。その阿弥陀仏のお心を「貴賤・縊索を簡ばず、男女・老少を、はゞ、哉罪の多しうと聞はず」と親鸞は、（さいじやく）

（教行信証）註釈版聖典二四五頁
「道場の多少を問はず」
（貴い人だと）か貶しい人だと
か、出家とか在家とかの選別
をせず、男と女、老人と若者
といった差別をせず、犯した
罪が多いとか少ないとかも問
わない）

仏となつたことを、確信を持つて述べてゐるのである。同じ念佛の信心に生き、ともに浄土への人生を歩んできたゆえんである。

●「惠信尼消息」にみる夫婦間

これらの中には、親鸞と法然の出遇いの経緯や、惠信尼から見た親鸞の生き様など、夫婦ともに念佛生活を送ってきた回想がつづられている。

たとえば『惠信尼消息』第一通には、惠信尼の夢告にまつわる思い出として、次のような記述がある。

あるとき夢を見た。それは、とある御堂で法要が行われていて、その御堂の前に鳥居のようなものがあつて、そこに二体の仏の絵像かけられていた。「何とおっしゃる仏さままでござりますか」と惠信尼が問うと、答える主はわからないが、「光つているのは法然聖人で、勢至菩薩でいらっしゃい

東信尼の廟所



それこそが善信房（親鸞）で、す」という答えが返ってきた。夢から覚めた惠信尼は、早速、親鸞にこの話をした。すると親鸞は、「法然聖人が勢至菩薩だというのは事実で、智慧の菩薩だから光り輝いているのです」と答えた。このとき惠信尼は、法然のことだけを話し親鸞が観音菩薩だということは口にしなかつたが、それ以来、夫親鸞のことを普通の人とは思えず尊敬の念をもつて接してきた。

れた本願の教えに出遇った親鸞が、妻帯して家庭をもつに至るのは、ごく自然の成り行きともいえる。また、親鸞の妻帯には、師匠・法然の次のような考え方影響しているともいえる。

「現世を過ぐべき様は、念佛の申されん様に過ぐべし。念佛の妨めなりぬべくば、何なりともよろづを顧ひ捨て、これを止むべし。云く、聖りで申されば、妻を儲けて申すべし。妻をまうけて申されば、ひじりにて申すべし」

『昭和新修法然上人全集』四六二頁
(この世の過ごし方というの
は、念佛を申すことができる
ように過ごすのがよいでしょ
う)

宗派／教区／組の動き

教区の動き

■教区仏婦五十周年 東京教区仏教婦人会連盟が五十周年を迎え、十月九日、ザ・プリンスパークタワー(港区芝公園)に於いてお裏方さま、臨席のもと記念大会



於 青山劇場
十二月

神奈川組仏教婦人会「めぐみ会」

「めぐみ会」は、組内各寺院の婦人会の連盟です。毎年、総会・研修会を開催し、各婦人会の交流と親睦をはかります。ダーナ(布施)活動として募金を行い、宗派を通して社会福祉に役立てる活動をしています。

【二〇〇七年度慶弔】

▼往生

○七年三月 善教寺前住職 佐々木 泰博様 八十五歳

▼結婚

○八年一月 善教寺副住職 平等 勝之様 ご結婚

宗派の動き

■前進座「法然と親鸞」

浄土真宗本願寺派・真宗大谷派・浄土宗の三宗派が後援の劇団前進座の特別公演「法然と親鸞」が、七月十三日より三十一日まで京都南座で上演されました。

同公演は、西本願寺で二〇二二(平成二十四)年にお迎えする「親鸞聖人七五〇回大遠忌」および、浄土宗における「法然上人の八〇〇年大遠忌」(平成二十三年)を記念し上演されるもので、法然聖人と親鸞聖人の出会いや歩まれた道、周囲の人々との絆を描くものです。今回の京都・南座での公演を皮切りに、二〇二二(平成二十二)年まで全国各地で公演が予定されています。

東京公演は二

〇〇九(平成二十二)年十一月(

十二月

於 青山劇場

が開催されました。神奈川組からも約二五〇名が参加されました。

■千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

九月十八日、浄土真宗本願寺派主催の「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」が、国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で厳修され、全国各地より多数の参拝者が訪れました。当日の法要は莊厳な雅楽の音が流れ、非戦・平和の願いの中、参拝者全員で「正信偈」が勤められました。

神奈川組の動き

■第八期連続研修会

連研(連続研修会)は、門信徒の皆さんに、浄土真宗のみ教えを体系的に学んでいただくことを目的に開催されています。第八期は二〇〇六年六月よりスタートし、偶数月の第三土曜日に開催され二〇〇八年四月をもって、全十二回の研修が修了する予定です。

第九期連研も開催の予定ですので、ご参加をご希望の方は所属のお寺までお申し込みください。

■第三十五回南ブロックお寺の臨海学校

毎年、神奈川・静岡・山梨三県より小学三年生～中学三年生の子供たちが集まり開催されています。昨年は足柄の「八戒莊」にて開校されました。

本年は七月二十九日(火)～三十日(木)の予定で、連舟寺(静岡県掛川市)にて開催します。

ご希望の方は所属寺までお問い合わせください。

■神奈川組仏教壮年会

組内の各寺院から集まつた会員が活発に活動中。宣正寺の早島大英師を講師に「歎異抄に学ぶ」というテーマで年四回程の研修会を開催しています。

十一月には、都留組寺院の行脚を行い、約九十名の参加者により、大月市と都留市の四ヶ寺を参拝し、日本三奇橋の猿橋を見学しました。

■淨光寺寺教会設立

四月に淨光寺教会(主管 白井淨信)が宗門包括の教会として設立されました。

一方、親鸞も、妻恵信尼のことを見音菩薩の化身であるという思いを抱いていたと『親鸞伝絵』は伝えている。かつて親鸞がまだ二九歳、京都の六角堂に百日間参籠したときに、観音菩薩が、やがて妻となつて生涯を随伴するため現れるという夢告をうけたことがあつたというのだ。

これらのエピソードは、二人が互いに菩薩として敬愛しあう夫婦であつたことを如実に語っている。

●信仰上のよき理解者

また『恵信尼消息』の第三通には、このような回想が述べられている。

一二三一(寛喜三)年、親鸞が五九歳のとき、風邪をひいて高熱のために床に臥したことがあった。寝込んで四日目の明け方、「まはさてあらん」(ああ、そうであったか)

と親鸞は、苦しそうな容態にありながら声を出した。

「どうかいたしましたか、う

なされて、うわごとでも申されたのでしょうか」と、看病していた恵信尼が声をかけると、「いや、うわごとを言つたのではないです。寝込んで二日目から、私はひたすら『仏説無量寿經』を読み唱えていました。目を閉じると経文の一文字ひと文字がはつきりと浮かんでくるのです」

高熱に喘ぐなかで親鸞は、十七、八年前の出来事を思い出して話し続けた。

「当時、衆生救済のためにと思つて、浄土三部経を千回読誦しようと決意したことがあります。しかし、阿弥陀仏の本願を信じ人にも教えて信ぜしむることこそ、仏恩に報いることだと信じていながら、念仏のほかに何の不足があつて経文を読誦しようとするのか、こう思い返して読誦を中止したことがありました。そんなことがあつたのに、今まで経文を読み上げることによ

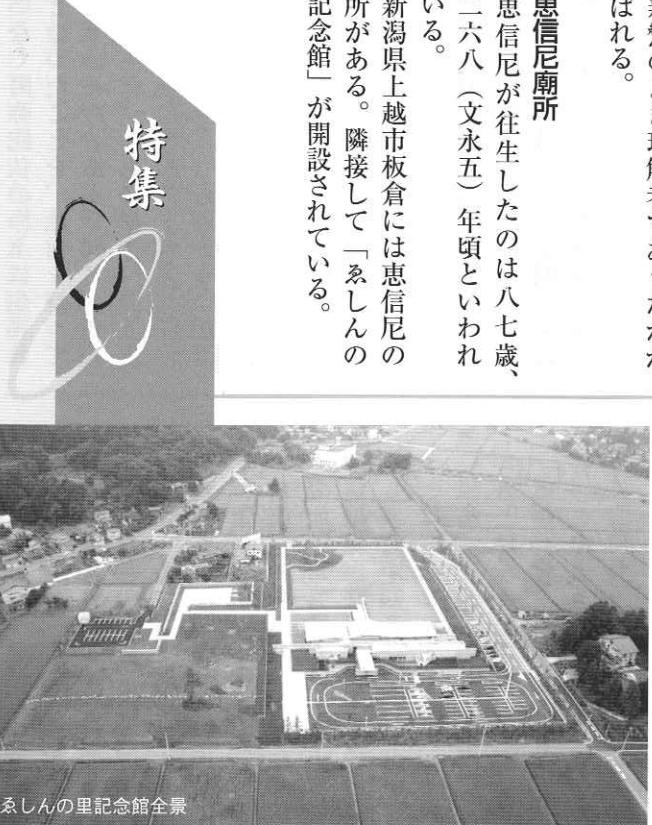
って功德を積み上げようとする自分に、まだとらわれ的心、自力の執心が残っていること、あらためて反省したのです。そうしたら経文を読むことはなくなりました」

このような思い出を、恵信尼は娘宛ての手紙に書いているのです。病氣で高熱にうなされながらも、我執の自己を克服しようとする夫親鸞の言葉を、妻恵信尼は生涯忘れることができない。恵信尼が信仰上においても、いかに親鸞のよき理解者であったかが偲ばれる。

●恵信尼廟所 恵信尼が往生したのは八七歳、一二六八(文永五)年頃といわれている。

新潟県上越市板倉には恵信尼の廟所がある。隣接して「ゑしんの里記念館」が開設されている。

▲「ゑしんの里記念館」 開館時間／午前9時～午後9時 休館日／月曜日(月曜が祝日の場合はその翌日) 住 所／〒944-0135 新潟県上越市板倉区 米増二七番地四 電 話 0255-81-4541 アクセス／JR信越本線「新井駅」下車。タクシーにて約一〇分。



ゑしんの里記念館全景



「うける」

最近、落語がブームのようです。NHKの朝の連続テレビ小説も、女性の落語家を題材にした物語です。

落語で「うける」「うけない」という言葉を使いますが、これは净土真宗のお説教、節談説教の用語でした。説教は一方的に布教がしゃべるのではなく、絶妙のタイミングで聞き手がお念仏で答えて、説教の場を盛りあげます。このお念仏の事を「うけ念仏」といいます。だから「うけた」とは、うけ念仏が沢山あつたという事。つまり説教の場がお念仏の声で盛りあがつたという意味から、落語でも使われるようになつたそうです。



法燈明

のみ教えを伝えるため活動している人々を、当時の権力者は力で弾圧したのです。そのことに対する憤りを、短い文草の中に鋭く示されています。

当時、仏教は、選ばれた人々のための教えであり、一般庶民が仏教に触れることができるのは、加持祈祷など呪術的側面しかありませんでした。法然上人は大衆に門戸を開きます。お念仏ひとつで救われると説く法然上人のもとには、瞬く間に大きな念佛集団が築かれていきました。

それを快く思わなかつた人々が、法然の教えは國を滅ぼすものと時の朝廷に上申するのです。しかし、それが簡単に受け入れられたのではありません。

「水島、一緒に日本に帰ろう」その呼びかけにもかかわらず、僧侶となつた水島上等兵はビルマに残る。

『ビルマの豊琴』の映画や小説で、ビルマという国を知らない日本人は少ないと思います。とにかく親しみのある国、ビルマです。しかし、昨年(二〇〇七年)そのビルマから、衝撃的なニュースが流れてきました。

悪政に対し、僧侶が立ち上がり抗議行動を始め、それが全国に広がりました。軍事政権は、武器を持たない民衆に対して、武力で制圧にかかりました。そこで、日本人ジャーナリストの長井健司さんも犠牲になつてしましました。

それらの映像を目当たりにして、多くの僧侶が還俗させられ処罰されているのです。

ビルマの国名をミャンマーと改称した軍事政権は、既得権益を守るために弾圧を続けることでしょう。世界がこの国を注目していくなければ、人々の苦しみが解消されることはできません。無辜の民のいのちが奪われていく事実から眼を背けることはできません。世界にはまだそのような国や地域があります。それほど極端ではなくても、人のいのちを粗末にすることを英雄と錯覚させる教育が、いたるところで行われています。日本も例外ではありません。

ニュース映像の取材中の長井さん。世界にはまだそのような国や地域があります。それほど極端ではなくても、人のいのちを粗末にすることを英雄と錯覚させる教育が、いたるところで行われています。日本も例外ではありません。

今からちょうど八百年前、承元の法難といわれている念佛弾圧が起きました。親鸞聖人はその時のことを、「教行信証」の中にこのように記されています。原文で紹介します。

「主上臣下、法に背き義に違ひを成し怨みを結ぶ。これによりて、真宗は興隆の大祖源空法師ならびに門徒數輩、罪科を考へず、猥りがはしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す。予はその一つなり」

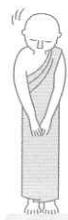
親鸞聖人の著述の中で、ここまで激しい表現は他に見当たりません。ただ、人々の心の安らぎを願いお念佛されることは、いつの時代にもあります。

ミャンマーの僧侶たちの行動を見ます。後鳥羽上皇に使える一人の女官が、上皇が留守の間に法然上人の教団に出来するといつて出来事があり、上皇の逆鱗に触れ承元の法難が勃発することになります。四人の僧侶が死罪となり、法然上人をはじめとして親鸞聖人も、還俗させられ罪人として遠流の身となります。「予はその一つなり」という言葉にすべてが込められています。

仏教をはじめとして宗教が政治に

世のなか安穏なれ 仏法ひるまれ

あんのん



人を虫けりのごとく扱うその非道さに、強い憤りを覚えました。

一

ビルマの僧侶たちは、「覆鉢行」という形態で抗議行動をしました。軍事政権からの布施を受けないとの意思表示です。それはビルマの人びとの強い共感を得ました。しかし、その結果、多くの僧侶が還俗させられ処罰されているのです。

ビルマの国名をミャンマーと改称した軍事政権は、既得権益を守るために弾圧を続けることでしょう。世界がこの国を注目していくなければ、人々の苦しみが解消されることはできません。

武器を持たず、軍に抵抗する素振りもありません。その長井さんを、至近距離から射殺する兵士。彼にとつては、上官の命令に従つた正當な行為なのでしょう。しかしそれは、国家による人権無視の残酷行為でしかありません。このような軍事政権のもとで生活する人々が心配なりません。

二

今からちょうど八百年前、承元の法難といわれている念佛弾圧が起きました。親鸞聖人はその時のことを、「教行信証」の中にこのように記されています。原文で紹介します。

「主上臣下、法に背き義に違ひを成し怨みを結ぶ。これによりて、真宗は興隆の大祖源空法師ならびに門徒數輩、罪科を考へず、猥りがはしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改めて姓名を賜うて遠流に処す。予はその一つなり」

親鸞聖人の著述の中で、ここまで激しい表現は他に見当たりません。ただ、人々の心の安らぎを願いお念佛されることは、いつの時代にもあります。

ミャンマーの僧侶たちの行動を見ます。後鳥羽上皇に使える一人の女官が、上皇が留守の間に法然上人の教団に出来するといつて出来事があり、上皇の逆鱗に触れ承元の法難が勃発することになります。四人の僧侶が死罪となり、法然上人をはじめとして親鸞聖人も、還俗させられ罪人として遠流の身となります。「予はその一つなり」という言葉にすべてが込められています。

仏教をはじめとして宗教が政治に

…身近な仏教語…

「宗教」



昨今では、外国でも使われる日本語が結構多くなってきているようです。刺身や寿司等の他、津波や交番など音をそのままアルファベットで表したものから、漢字がそのまま印刷してある柄のシャツまでさまざまに使われています。

実は日本で使われ始め他の国でも使われる様になった言葉は意外にも多く、特に中国ではその言葉なくして教育が出来ない程多く使われている事を聞きますと、やはり近い国として互いに付き合ってきた歴史を感じます。

現在中国で使われている日本製の言葉は主に明治期に伝わったものが多く、自由・科学・哲学などの主に西洋思想の訳語として使われていた言葉が、当時日本に滞在していた孫文らをはじめ多数の知識人を通じて中国本土に伝わったと言われています。「宗教」という言葉もその中の一つです。新しく日本に入ってきた西洋の考え方である「神への忠誠 religion」の訳語として日本で使い始められました。

「宗教」という言葉は、全く新しく作った造語ではありません。当時的人が漢字の歴史をさかのぼり、六世紀頃、中国で「仏教」を表す言葉として使われた「宗教」という言葉を「religion」の訳語に当てたのでした。ですから、逆輸入された言葉と言えましょう。

そもそも「宗教」は、教えの中にひそむ究極の理を表す「宗」と、相手に応じて色々な形で存在する「教」の意味を合わせた言葉で、「仏教」を意味していました。

その昔に仏教を指していた中国の言葉「宗教」に、日本人が光を当て、新たに意味を付け加えて時代の要請に応えようとした思いが、再び中国の人々にも伝わり使われるようになった言葉なのでしょう。このように、言葉も、人と同じように時代や文化など色々な出会いがあって花開くものなのかもしれません。

ポストエイオス研究会
インターネットのホームページを開設。
法話や仏教情報などのページです。
<http://www.posteios.com>



テレホン法話
電話で仏さまのみ教えを！

- 築地本願寺こころの電話
TEL.03(3541)0294
- 長念寺テレホン法話
TEL 044(911)8282

ビハーラ電話相談
老いの悩み、病の苦しみにー
相談日▶毎週月・金／午後2時~5時
浄土真宗東京ビハーラ(築地本願寺内)
TEL.03(5565)3418

ちょっと一息

行くさきむかひばかりみてあしもとをみねば、
踏みかぶるべきなり。

人のうへばかりみて、

わが身のうへのことをたしなまずは
一大事たるべきと仰せられ候。



れんによしょうにんご いちだいき さきがき
『蓮如上人御一代記聞書』(191条)

この蓮如上人は、「先のことばかり気にかけて、足下をみないと踏み外してしまうことと同じように、「人のことばかりみて、わが身のことを見つめないと一大事になりますよ」と諭しています。わが身の一大事とは、後生の一大事のことです。人のことばかりに気をとられ、自分のいのちの行くすえを見ておかないといけませんよということです。

仏さまの教えは、生死を超えてくださる教えです。だから、いま聞いておかないといけませんねと教えてくださっているのです。



「全国津々浦々」

昨年、郵政民営化がスタートした郵便局ですが、郵便局の良さは全国津々浦々どこにでもあって、全国どこでも同じ郵便サービスが受けられるネットワークが確立されていることです。

全国の郵便局の数は約二万四千です。面白い事に、全国の全ての小学校の数が約二万三千校で、郵便局の数に近いそうです。なるほど、このくらいの数があって初めて、「全国津々浦々にある」と言えるのでしょうか。

ちなみに、浄土真宗(真宗十派全て)の寺院の数は二万二千ヶ寺ですので、少し少ないくらいと言えます。しかし、地域によって真宗寺院が多い少ないという偏りがありますので、「全国津々浦々」とまでは言えないのかもしれません。特に首都圏には浄土真宗のお寺が少ないので、もっともっとお寺があつてもよいのでしょうか。

仏事のこころえ

お焼香時の挨拶は必要?

最近、法事の焼香の際に、仏さまの方にお戻を向け、かしこまって参列者に対して深々と挨拶をするケースが非常に目立ちます。丁寧なようですが間違った習慣です。以前は、このようなことはありませんでした。私たち現代人が、仏さまを敬うよりも人の目を意識するようになってきたということではないかと思われます。

読経中の挨拶は、仏さまを敬い集う(仏事)人びとの前に割り込み、人間どうしのおつきあいの世界(世事)に引き戻す行為ということができます。「より丁寧に」と考えてのことなのでしょうが、礼をつくすどころか、仏さまに対して、また参列者に対しても非礼なことになってしまっているのです。

前のひとがご丁寧な挨拶をすると、同じようにしないと非常識と思われるのではないかと不安になるのも人情ではあります。しかし、間違ったことは勇気を持って改めるようにいたしましょう。



『お坊さん上・下』 本願寺出版社 いまこうじ 今小路 覚真 著

上巻—お葬式から見える人生万華鏡—

下巻—知っておきたいお葬式の作法と意味—

京都、西本願寺の会行事(儀礼の統括責任者)である筆者が、現代世相を通して「生老病死」を見つめ、“いのち”的ありさま、お葬式の本当の意味について語ります。

私たちにとって、宗教とはいったい何であるのか?生まれてからいのち終えてゆくまでの多くの通過儀礼。そのほとんどは宗教と密接にかかわりあっているにもかかわらずそれに気が付かずやり過ごしている私たち……。

寺に生まれ新聞社に勤務した20代、その後富山県で25年間を過ごしたのち本願寺式務部に身を委ねる。このような経験に基づいた筆者ならではの視点が、私の心に“ストン”と落ちた一冊です。

お寺を訪ねて(20)

横浜市営地下鉄弘明寺町駅より徒歩で3分、京浜急行弘明寺駅より徒歩8分、神奈川県警南警察署の近く、旧鎌倉街道に入ったところに善然寺があります。周辺には民家や商店が建ち並び、すぐ近くに通る鎌倉街道は昼夜を問わず交通量も多く賑やかな街並みです。

善然寺は、大正時代末に真宗大谷派(東本願寺)の別院に奉職されていた尾崎善然師が、縁あって本願寺派(西本願寺)の大岡説教所を開設したことにはじまります。昭和6年には入仏式も勤まり、布教拠点としての形態が整ったそうです。

平成2年に、現在の本堂及び庫裡が竣工されましたが、当時住職であり神奈川組・組長であった永野弥彦前住職は、組の活動に加え自坊の本堂建設という大事業を成し遂げ大変な苦労があったようです。平成11年4月より善然寺の住職に長谷山顯俊師が就任し、現在に至っています。

善然寺では、毎月6日の定例法座、除夜会・元旦会・春秋彼岸会・永代経・盂蘭盆会・報恩講が年行事として催されています。

平成14年6月には門信徒相互の親睦を深めるために、「善然寺門信徒会」も結成されました。この「門信徒会」では、年1回の参拝旅行を始め、月2回「そば打ち」の体験も行っています。この「そば打ち」は6月の定例法座において参拝者に振る舞われ、日頃の成果を披露しています。

また、「善然寺雅楽会」も結成され毎月4~5回の練習を行っています。1月の定例法座(初法座)と秋の彼岸会法要ではこの「善然寺雅楽会」による演奏が行われています。

毎月2回「お経の会」も開催されていて、お経(声明)を習うことができます。参加者は、築地本願寺の法要などに参拝した際、難しいお経であっても一緒に勤めできているそうです。

善然寺では、坊守の美菜子さんが「善然寺よもやまばなし(<http://blog.goo.ne.jp/h-lizu>)」というブログのホームページを開設しています。善然寺で開催される行事についての掲示から、日頃の活動報告、仏事のこころえ、生活の知恵など毎日更新されています。ホームページは門信徒の方々にとってお寺の情報源になっていて、「今日は台風だからやらないと思ったけど、ブログを見たらやるって書いてあったんで来たよ」などと、ブログで確認してから参ってくる人も多いようです。

このように日々ご門徒がお寺に足を運び、お寺と門信徒が一体となって善然寺を盛りあげています。ぜひ一度お参りください。



～寺院門徒一体のお寺～

せんねんじ
善然寺

横浜市南区大岡 2-26-17

お手々のしわとしわをあわせて…しあわせ

日本の美・日本の心をお届けします。

お仏壇・お墓 はせがわ



業界初の上場企業
関東地区82店舗・全国で116店舗

~お仏壇、お仏具等~
**特別価格
大奉仕中!!**

墓石・霊園も
好評お取り扱いしております。

しあわせ少女ゆうかちゃん

横浜・川崎地区的店舗ご案内

金沢文庫店	横浜市金沢区谷津町352-7 オオサワヒルズ1F	0120-767-698
上大岡店	横浜市港南区日野5-1-25	0120-767-628
戸塚店	横浜市戸塚区柏尾町440-1	0120-767-627
今宿店	横浜市旭区今宿東町1621	0120-767-658
新杉田店	横浜市磯子区杉田1-1-1 らびすた新杉田1F	0120-484-883
長津田店	横浜市緑区いぶき野3-1	0120-744-194
鶴見駒岡店	横浜市鶴見区駒岡町4-23-4	0120-176-761
日吉店	横浜市港北区日吉3-4-8 リバーサイド日吉	0120-639-010
鷺沼店	川崎市宮前区東有馬1-1-19	0120-876-768
川崎店	川崎市川崎区東田町2-1	0120-767-577
町田森野店	町田市旭町1-8-20	0120-768-201
向ヶ丘遊園店	川崎市多摩区登戸1763 ライフガーデン向ヶ丘	0120-594-345

営業時間／午前10時～午後7時　日曜・祝日も営業いたしております。



お仏壇・お墓
はせがわ

昭和59年 京都西本願寺阿弥陀堂
昭和62年 京都清水寺開山堂御厨子
三重塔堂内修復事業
昭和63年 福岡証券取引所
業界初の株式上場
平成6年 大阪証券取引所第2部
株式上場

製造部
(株)はせがわ美術工芸
(国宝美術品、寺院神社)
(株)はせがわ仏壇工房明日香工場
(純金箔仏壇)
(株)はせがわ仏壇工房大川工場
(唐木仏壇)

わたしたちのお寺です

浄土真宗本願寺派 神奈川組

えんこうじ 円光寺	〒210-0814 川崎市川崎区台町 4-21 石川 康承 044-266-2677
ほうえんじ 宝円寺	〒210-0838 川崎市川崎区境町 5-10 飯田 琢亮 044-222-3941
こうとくじ 光徳寺	〒210-0848 川崎市川崎区京町 1-14-3 林 信順 044-333-3997
しょうらくじ 正楽寺	〒212-0016 川崎市幸区南幸町 2-49 佐々木俊博 044-522-1961
こうがんじ 高願寺	〒211-0051 川崎市中原区宮内 4-3-12 宮本 義宣 044-777-6544
ちょうねんじ 長念寺	〒214-0014 川崎市多摩区登戸 1416 小林 泰善 044-911-2549
じょうねんじ 常念寺	〒215-0033 川崎市麻生区栗木 203 古市 道仁 044-988-0205
じょうしょうじ 淨照寺	〒216-0004 川崎市宮前区鷺沼 2-5-7 加藤 孝充 044-855-2780
ぜんりゅうじ 善龍寺	〒221-0811 横浜市神奈川区斎藤分町29-51 斎藤 幸紹 045-491-9431
ぜんきょうじ 善教寺	〒223-0057 横浜市港北区新羽町 2396 平等 勝尊 045-541-7684
きょうがくじ 教覚寺	〒223-0057 横浜市港北区新羽町 2395 (代務)平等 勝尊 045-531-5050
こうりんじ 光輪寺	〒223-0064 横浜市港北区下田町 3-2-9 村石 恵照 045-561-8671
とうぜんじ 東善寺	〒224-0001 横浜市都筑区中川 7-18-29 長谷尾芳雄 045-911-3509
ちようとくじ 長徳寺	〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西3-9-1 平塚 大乘 045-911-7351
じゅふくじ 寿福寺	〒224-0033 横浜市都筑区茅ヶ崎東1-7-1 多田 龍空 045-942-3721
さいじょうじ 最乗寺	〒224-0034 横浜市都筑区勝田町 1277 日野 教秀 045-941-3541
じおんじ 慈恩寺	〒224-0055 横浜市都筑区加賀原2-18-1 小泉 敬信 045-934-8648

かながわそ 「神奈川組」とは…

私たちの教団（浄土真宗本願寺派）は、全国に一万余りの寺院を擁し教団独自の地区割をしています。その一番小さな単位を「組」といいます。神奈川組は、川崎市と横浜市中部と北部の寺院によって構成されています。

浄土真宗本願寺派東京教区神奈川組

組長／小林 泰善	副組長／長谷山顕俊	相談員／藤江 義昭
教区会議員／佐々木俊博	根本 猛（門徒）	副組長／早島 大英

童謡詩人

金子みすゞの詩

金子みすゞは、一九〇三(明治三六)年、山口県長門市仙崎に生まれた。本名を金子テルといい、「十歳頃(大正十二年)から詩をつくり、雑誌に投稿を始めた。ペンネーム「金子みすゞ」で初めて投稿した詩が『童話』『婦人俱楽部』『婦人画報』『金の星』四誌に一齊に掲載され、当時の童謡詩人たちのあこがれの星となつた。しかし、二十六歳の若さで亡くなつたため、その作品は散逸していたが、没後五十年余を経た一九八二年五百十二編の遺稿集が発見され、「金子みすゞ全集」(JULIA出版局)が出版された。

鯨法會

鯨法會は春のくれ、
海に飛魚採れるころ。

沖で鯨の子がひとり、
その鳴る鐘をききながら、
泣いてます。

みすゞは、大切なお父さま、お母さまを、
鯨たちへの思いと重ねてうたっています。この詩で、海の中でたつたひとり残された子鯨の気持ちを思つて、鐘の音を聞いてきっと泣いているだろうと子鯨へ思いをはせていました。みすゞのいのちらへのやさしいさです。

わたしたちは、他のいのちをいただいて、わがいのちを生きています。その事実に向き合つていけるのは、お念佛の教えに出あえているからではないでしょうか。「いただきます」という意味なのです。
わがいのちは、自分で生きているのではなく、多くのいのちのお陰で生かされていっていることに感謝せざるにはおれません。

—『金子みすゞ全集』
(JULIA出版局)より—



浄土真宗本願寺派 (西本願寺)

組報かながわ No.21

■発行日 2008年3月15日
(毎年1回3月発行)

■編集発行 浄土真宗本願寺派
東京教区神奈川組
基幹運動推進委員会

〒214-0014 川崎市多摩区登戸1416 長念寺内